心理教育学科

子ども教育専修（初等教育課程）カリキュラム

主な専門科目	1年次	2年次	3年次	4年次
プロゼミ	1年次 ● プロゼミ			
オムニバス	1～4年次 ● オムニバス「心理と教育」			
専門科目 教職・教科にかかわる専門科目	1～4年次 ● 初等教育方法 ● 子どもの体育 ● 保育原理 ● 初等教育心理学 ● 保育学 ● 子どもとことば ● 発達心理学 ● 教職概論 ● 子どもと環境 ● 算数の内容・構成 ● 教育原理 ● 子どもと造形表現 ● 子どもの造形 ● 生活科の内容・構成 ● 子どもと人間関係	2～4年次 ● 初等教育の制度と社会 ● 初等特別活動論および総合的な学習の時間 ● 理科の内容・構成 ● 音楽（楽器演奏） ● 乳児保育 ● 保育内容（生活と環境・表現・人間関係） ● グローバリゼーションと教育 ● 初等生徒指導論 ● 発達障がいの基礎 ● 社会科の内容・構成 ● 初等教科教育法（算数・生活・図画工作・音楽） ● 保育内容総論 ● 子どもと音楽表現	3～4年次 ● 教育課程論 ● 初等教育相談 ● 家庭科の内容・構成 ● 初等教科教育法（国語・理科・家庭科・社会・英語） ● 保育カリキュラム論 ● 幼少教育課程論 ● 特別なニーズのある乳幼児への保育と教育 ● 保育内容（ことば） ● 初等道徳教育論 ● 国語の内容・構成 ● 小学校英語の研究 ● 保育内容（健康） ● 子ども理解と保育・教育相談	
専門科目 研究法科目		2～4年次 ● 授業研究の方法 ● 保育記録の研究		
専門科目 実習関係科目	1～4年次 ● 学校インターンシップ	2～4年次 ● 学校特別支援インターンシップ ● 保育インターンシップ	3～4年次 ● 教職キャリア研究	4年次 ● 教育実習（初等） ● 教育実習事前・事後指導 ● 教職・保育実践演習
演習			3～4年次 ● 専門ゼミ	4年次 ● 卒業論文
共通教養科目				
外国語科目				

※2023年度のカリキュラムです。2024年度のカリキュラムは変更される場合があります。

■ PICK UP 授業

初等教育方法（情報通信技術の活用含む）

入念に工夫してつくられてきた学校教育。その特殊な方法を紐解いていく。

教育というと学校を思い浮かべる人は多いと思います。でも教科書を広げ、黒板を使って物事を教わる場面は、学校や塾以外ではそうそうありません。それもそのはず、実は学校で行っている「教育」は、特殊な方法で入念に工夫してつくられたものなのです。この授業ではそんな小学校教育の方法について学んでいきます。

教職概論

ただ教えるだけではない教師の仕事を、より多角的に見つめ、考察する。

教師の仕事はただ教えるだけではありません。多くの事例を紹介しながら、教師の仕事について多角的に考えます。どのように子どもを見守り関わるのか、労働環境はどうなっているのか、教師という仕事の面白さや大切さなどを学び、理想とする教師像を描けるようになることをめざします。

教職キャリア研究

教職とは何か、教師に何が必要か。理論と実践の双方の観点から学ぶ。

教職とはどんな仕事か。現代の学校教育にはどのような課題があるのか。教師になるためにはどのような勉強が必要か。こういったトピックのもと、理論と実践の双方の観点から教師として必要な素養を身につけていくことをめざします。

■ 履修スケジュールの例

（1年次前期の場合）

	MON	TUE	WED	THU	FRI	SAT
1			教育の考え方		教育原理	学校インターンシップA
2	野外教育論	教職概論	発達心理学		子どもの造形	
3	スポーツ文化		プロゼミ	英　語	算数の内容・構成	オムニバス「心理と教育」
4	初等教育方法				英　語	
5				法と人権		

専門科目　共通教養科目　外国語科目　自由履修科目（講義バイキング）

■ 卒業に必要な単位

（合計124単位以上）

		小計	合計
共通教養科目		20単位	124単位
外国語科目		4単位	
専門科目	プロゼミ	4単位	
	演習	4単位	
	学科専門科目 子ども教育専修必修	18単位	
	学科専門科目 子ども教育専修選択必修	47単位	
	卒業論文	10単位	
自由履修科目（講義バイキング）		17単位	

■ 卒業論文テーマの例

- 戦前の国定国語教科書に関する研究
- 児童期における問題行動の外的要因に関する考察
- 小学校教育におけるADHD児童と教師とのかかわりについて
- いじめといじりはどう違うのか
- 敬語は差別なのか
- 居場所のある学級づくりとは
- 子どもたちが多様性を認め合える学級経営
- 「主体的な学び」の実現にむけた教師の役割
- わがままの可能性
- 個人名は自己像と関係するか
- 人はなぜ愛し合うのか
- 「テレビ離れ」の実態から考えるテレビ局の展望